朝日新聞（夕刊）　1977年1月10日　第3種郵便物認可

現代中国学の立場から

政治文化の理解前提

大切な「違和感」の解明

中嶋嶺雄

この一月八日は、世紀の宰相・周恩来の没後一周年であった。中国の人びとは、過去一年間の政治的ドラマのあまりにも激しい連鎖を思い、感慨というよりは心の昂（たかぶり）のなかで新しい年を迎えたことだろう。

虚妄の文化大革命

昨年六年はまた中国にとって、文化大革命の十年目にあたった。文化大革命は紛糾革命だといわれたけれども、毛沢東の死と党の北京政変とによって、おそらく中国の民衆は文化大革命をすでに完全に過去のものとして考えているにちがいない。中国のリーダーたちも、もはや文化大革命を再び鼓吹することはないのではなかろうか。やはり文化大革命は大いなる虚妄であったのだ。

文化大革命、中ソ対立さらには「大躍進」政策と遡及（そきゅう）することほぼ二十年、現代中国の動向がつねに注目されてきたのは、たんに現代中国の諸展開が私たちの同時代史においてもつ意味の大きさという点からだけではない。そのような中国にたいする私たち個々人のイメージが、私たちの世界認識ないし思想のありようを反映し出す鏡でもあったからである。それだけに、中国研究とくに現代中国研究に携わる者は、中国の激しい政治的変転に流されてたえず冷静の場に立たされて来たし、さまざまな批評にも耐えねばならなかった。

そうしたなかで、フランスの若き中国研究者エクトール・マンダレがフランスにかんして、「フランスの新聞や雑誌は、中国人民共和国に関することに貢献した破廉恥な『黄沢』報告書にのっとられている」（「中国人民のなかの文革」）と述べていたように、毛沢東主義ないし文化大革命に陶酔する熱狂は国際的にもかなり広範囲に広まり、わが国でも、その傾向は著しかった。「毛沢東思想の世界史的意味」などが、当の中国の政治的現実や中国民衆の意識なり「体験」なりとはまったく無関係に、いわば観念の遊戯のなかへ「我田引水」するかたちで、これまでいくたび語られてきたことか。

価値判断する訓練

だが昨年一年間の中国での出来事は、このような中国論議に心地よく身をゆだねてきたわが国の知識人にたいしても裏面から問題をつきつけたはずである。にもかかわらず時評家たちの多くは、自己の総意（しい）的な中国認識をよそにして、こともあろうに、わが国の中国にかんする「論壇の脆弱（ぜいじゃく）な体質」（武者小路公秀氏）、「日本の中国観測の弱さ」（河合秀和氏）などを指摘し、半面、私などの予測が当たったのは、中国を「冷たい目」で見ているからだと評していた。

このような批評の当否については、いまここでは立ち入らないとしても、ひるがえって考えてみると、こうした批評が今日のわが国で提示されるのは、中国情報の氾濫（はんらん）、中国論議のかまびすしさにもかかわらず、現代中国研究がわが国ではまだ現代中国学として十分に確立していないことにもよるように思われる。一方、研究対象としての今日の中国は、いままでに大いなる歴史的移行期にある（それはたんに毛沢東、周恩来没後の中国がいわゆる「毛沢東以後」の時代へ移行しつつあるという意味だけではなく、まさに革命後四半世紀を経た今日の中国が内在的にも新しい社会システムと価値観事を求めているという意味でも歴史的移行期なのである）。

しかも、スターリン死後のソ連社会の流動と明治維新前後ドラマと三国志の世界とがこん然一体となったようなダイナミックスを示しつづけているがゆえに、まさにわれわれは、なぜ中国では旗新聞が重要な意味をもつのかもわかる）、中国には『人民日報』のような顕数的メディアのほかに、約七〇〇万部という『人民日報』よりはるかに多い発行部数をもつ情数的メディア「参考消息」などがあること（このことがわかれば、田中逮捕を『人民日報』が報じなかったのに、多くの幹部がその事実をよく知っていることの理由がわかる）などの基本的前提をおさえておくべきであろう。

そのうえで、これらを総合し得る問題意識をもつならば、いかに激動の中国といえども、その基本的な方向を把握（はあく）できないはずはないのである。私にとっては、これまで、わが国の新聞の中国報道を読み、違和感を覚える部分をつっこんでみることが「反面教師」的に役立ってきたことも否めない。

大筋の予見は可能

もちろん、アメリカの現代中国学のよい部分を集大成した観のあるドーク・バーネットの近著『不確かな遺産』にも語られているように、「裏面目な研究者なら誰でも、中国について一つ確かなことは、予期しないことが起こることを考えておかねばならないことだ」ということを知っている」。同時に中国研究を現代中国学として志向するかぎり、中国の政治的ドラマの個々のプロットや個々の断面についてはともかく、大筋のシナリオや風流については予見し得るのが当然だと私は考えている。

今日、江青夫人があのように悪しざまに罵倒され、一方、華国鋒への英雄崇拝が高まっていることと、そのことは当然、毛沢東の権威が相対化されはじめていることである半面、中国内政がその不安定と悪循環から依然として立ち直っていないことだと、当の中国人は考えるであろう。

（東京外語大助教授・国際関係論）

(現代中国学の立場から　政治文化の理解前提(朝日新聞夕刊-1977.01.10